

さくら川

第五一号 平成十六年十月十五日

熱日高彦神社社務所

電話 〇二二四・六二・〇二四一

atuhitaka@hitaka.org



歴史的豊作に感謝し

秋の例祭Ⅱ新嘗祭を齋行

見わたす黄金の田の面を見て、人の立場をこえて心を和ませた。農政の境い目で、米の価格や、流通のことを考えると、複雑な思いもあるが、一億のお腹を満たすお米の豊作は、何にも替え難い祝福に値する。去年の冷害を、われわれは如何に虚しい思いで過ごしたか、記憶に新しい。それを見事乗り越えた。

日本人は昔から、一年を稲の生育と供に過ごしてきた。種籾に拝ん松を立てて年迎え、春の祭、夏の祭、盆踊り、夫々の月の節句：：年中行事のほとんどが稲との関わりである。「和」は日本の古称。「禾」（みのり）を「口」にすると人は「なごむ」。日本は元々、実りを口にして和やかな国なのである。

十一月二十三日は全国一斉、当社の新嘗祭。これと似て全国一斉に、家々で新穀に感謝するのが九月節句。各家で取り入れを祝うのが「刈上げ」「かつきり」など。家々から国の単位まで、祝う秋。そして今年は祝うに値する秋を迎えた。

元来「祝う」は「いはふ」Ⅱ「い這ふ」であった。「い這ひおろがむ」、つまりひれ伏して祭りをする、或は感謝する意味である。農家の方々、それを導いた神様に心から祝いたい。

特別寄稿

「祭らしい祭」

いつまでも」

白石市益岡鎮座 神明社

禰宜 佐藤文比古氏



一昨年と今年の春祭、神輿渡御に付き添って写真とビデオを撮っていたバイクの青年。実は白石の神主さんでした。感想をお願いしたところ、快くご寄稿くださいました。

私は熱日高彦神社の御例祭の日に、御神輿の行くところをバイクで走り回ってビデオ撮影をしていた者です。氏子の方の中には「どこの取材の人なんだろう?」と思われる方もいらっしやったかもしれないですが、ここで自己紹介をさせていただきます。私は白石市の益岡（お城山）に鎮座いたします神明社の禰宜の佐藤文比古と申します。数年前、県内若手神主主催の宮城刑務所の慰霊祭ではこちらの神楽会の皆様にもお世話になっております。

熱日高彦神社の春祭りはおとなりの香取神社の御神輿と二つ一緒にまわられるとうかがっております、どのようなお祭りなのか見てみたいと思っております。一昨年もお邪魔したのですが、ちょうどバイクに乗るには良い季節ですし、「黒須さんのところにちよっとお手伝いに」と理由付けをして、実は半分ツーリングの気分で行ってきました。

今年の四月六日も良いお天気で、私は一時ごろ神社に着き、まずお参りをさせていただきました。神社に上っていくと屋台が出ており、御神輿が出ている時間なのにお参りされていく方も多かったです。



ました。続いて御神輿を探してビデオを撮っております。今年はお祭りの前に河北新報に「二社の御神輿と一緒に地域をまわるお祭り」と記事が載ったこともあり、市外からいらっしやった方も多く見られました。

高校生からそのお父さんくらいの方まで御神輿を担いでおられ、継承しようとする良い姿を見せていただきました。親子で、家族で、そして地域で盛り上げる昔ながらの、本来のあるべき祭りのかたちなのではないかと思えます。最近はいベント化され、祭りの意味を履き違えて一部だけが盛り上がっている祭りが多くなってきたように思われます。そのような中、氏神と氏子の関係を深く保ち次



世代にも伝えようと思われている姿は、とても勉強になるお祭りであります。

また来年もうかきたいと思えます。いつまでもこのお祭りが継承され、あたたかい郷でありますようご祈念して・・・。

写真中央は愛用のバイク
左下は枝野小学校を出発する子供みこしと本神輿

(共に佐藤氏撮影)

お知らせ

七五三詣

例年の七五三詣では、十月末から十一月前半で行いますが、早めに申し込みされるようお願いいたします。



枝野幼稚園のげんきなおともたち
お参りのあとは落ち葉とドングリひろい？

お節句 (十月二十二日)

九月節句(旧九月九日)は、十月二十二日(金)に当たっています。節句等は植物や天体とかかわりが深く、その結びつきが古い時代であるために、旧暦がふさわしいことが多いようです。

三月桃の節句、五月菖蒲の節句、七月七夕、

九月菊の節句とほとんどが植物で、七夕は天体。自然の豊かな日本ならではの、赴き深い行事というべきでしょう。

さて、今年は閏があったために、現在の太陽暦とはひと月以上のずれが生じますが、心ゆたかに季節の行事を楽しみましょう。

ことに九月節句は実りの感謝の行事でもあります。豊作の上に、刈り入れからたっぷりの期間があります。新しい稲苞にお赤飯を入れてお供えする、昔ながらの仕来たりを、子や孫にしっかりと伝えたいものです。竹筒を二つ折りに結わえて甘酒を入れるお供えはあるでしょうか。

一日を今は、真夜中の〇時を境として暮らしていますが、前夜からその日の夕方までという考え方が古くありました。そう考えると七夕は七月の六日の夜ですし、十五夜は十四日の晩となります。実際そういう仕来たりもあったようです。皆さんのお宅ではいかがですか。

九月節句のお供えを、前日の夕ご飯時に上げる家はありませんか。家々の特徴も面白いですね。

新しい神様をお迎えし

新しい良き年を

今年もあと二月あまりとなりました。神社ではすでに年末・年始の準備が始まっており、ます。中でも師走に入りましたらお配りする、

新年を迎えるためのお札のあつかいは厳重です。

伊勢の神宮からいただく神宮大麻「天照皇太神宮」は、十月に神宮での頒布始祭をもって全国に頒布された後、宮城県神社庁、角田市伊具郡支部、当神社と、あわせて四回ものお祭を経て皆様のお宅へ分かたれます。

「お歳徳神さま」といわれる五体組のお札は、一体ごとに

神璽、神社庁印、宮司印を奉印し、やはりお祭お祓いをしてお分ちします。神社の神札も同じです。

なぜそこまで厳肅にするのでしょうか。それはこれらのお札が「新しい年」そのものだからです。



「年」稲などの穀霊「神霊」であることは以前に何度かご説明いたしました。新しい年を迎えるということは新しい神様を家の神棚にお迎えすることです。歳「年をとる」ということは、自分の中に新しい靈魂を迎え入れるということなのです。ですから、新しい年が皆様にとってより良い年でありますようにと、新年のお札は丁寧に、厳肅に、何度も何度も

繰り返しお祭するのです。これほどご神威を込めるお札はほかには無いといっているでしょう。

お札を納めればそこが神棚

ところで最近、若い方から電子メールで「アパートで神棚が無いのだけれど、お札をお祀りしてもいいものか」といった問い合わせをいただきます。おそらくアパートやマンション、建売住宅などには神棚が無いところが多いでしょう。そういった問いに対しては「神棚を設けるに越したことは無いが、たとえばタンスやボードの上、本棚の一段の一角など、粗末にならないところで、自分が納得できる場所であれば、そこを神棚に決めていいですよ。それにお宮が無くて、当面はお札を立てかけることでもかまいません。インターネットにあわせた祀り方を工夫してはどうですか。神様をお迎えすることが先ず大切なのですから。」といった返答をしています。お子様やお孫さんでそんな環境にお住まいの方がいらっしゃるのではないのでしょうか。

ちなみに神棚は新築や引越しのとき、そして年が改まるときにお祭りするのが吉とされます。

今の時期になると「一年はあつという間だなあ」と思います。どなたにも良い年をとっていただけるよう、誠意を込めてお札を奉製する毎日です。

神様に見守られて、豊かな気持ちで生きたいですね。

社頭あれこれ

夏祭 各位のご協力で

年々賑やかに

夏季例祭は、有志青年たちの協力で、大変な賑わいを見せた。今年の祭も灯籠や神楽、巫女舞（みかぐら）、それにきつても切れない存在になつて若者有志による振る舞い、さらに花火もとうとう三〇発を超え、いよいよあつた夏祭となった。ご協力、ご奉献、ご奉納いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



五十九年目
の八月十五日

忠

霊塔・忠魂碑慰霊祭

八月十五日の終戦記念日は「戦没者を追悼し平和を記念する日」として国民の祭日にされて



います。今年は終戦から五十九年目。あと一年で還暦です。例年の通り角田市の忠霊塔前で、遺族会主催の慰霊祭が、伊具地区内の若い神職の奉仕で行われました。これに先立ち、当神社境内に在る、旧枝野村の忠魂碑前で、朝八時から慰霊祭を行いました。年々参列者がさびしくなっておりますが、今年三品区長さんが見えて、枝野島田住民を代表して玉串を捧げられました。国の命令で戦場に向かい、からだを張つて国の、国民の安全を守るために戦った勇士の御霊に対する枝野地区民の思いを、こんなところで表してみたいですね。

神社と地域の未来を見据えて

一九〇〇年記念事業検討委員会

平成二十三年に迎える当社御鎮座一九〇〇年に向け記念事業を起こすべく、神社役員・総代により検討が重ねられている。それは、この大きな節目を好機と捉え、目先ではない、これからの神社のあるべき姿を模索する作業となっている。



まず人が集まる神社づくりが大切との考えに立っている。信仰が広まることにより御神威が増す。それは経営の安定化、ひいては氏子への負担減ともなる地域と結びつけば活性化につながる。

また都市化、高齢化が進み、

誰もが心の安らぎを求めるなか、「いやし」「再生」の場として神社が認識されており、参拝者も徐々に増えるにつれ、それに適う環境整備がいつそう求められる。

一方、長年の風雪や湿気により社殿の腐食、破損が著しい。防災への備えも心もとない。また歴史的建造物ゆえに今日的な折りの施設としては十分とはいえない。修繕や施設整備が必要

である。

施設、境内、鎮守の森にまで及ぶ事業であり検討は多岐にわたるが、来年三月には概略を示したいと考えている。

~~~~~

### お日高さんの自然 ⑪

#### 「マンジュシヤゲ」

神社の車参道にマンジュシヤゲが咲く。マンジュシヤゲの正式名はヒガンバナ（ユリ科ヒガンバナ属）である。人家に近い田畑の縁、堤防、墓地などに群生して秋の彼岸の頃、あたかも篝火を燃やしたように、いくつもの真紅の花を開く。マンジュシヤゲの命名の一説は「法華經」に、摩訶曼陀羅華と摩訶曼珠沙華が、会い難い仏縁に会ったことを喜び、天から降り注いだとある、によるといわれる。摩訶は梵語で大きいこと曼珠沙華は赤い花の意味で、この花の大きくて美しい有様を言い表したものだという。（注1）

又、ある説では、曼珠沙華は仏典の中天界（空想）の花であり、インドのある地方の言葉で「マンジュシヤカ」といい、曼珠沙華と音訳してヒガンバナの別名にしたのである。じつは、天界に咲く曼珠沙華は白い花で、その純白の花を見る者は悪業を離脱できる——といったよ

うに仏典に書かれてあるという。（注2）マンジュシヤゲが、寺院の境内や墓地によく咲いているのは人間がわざわざ植えたからで、日本では「死人花」などと縁起のよくない名で呼ばれ不吉な花とされているが、欧米では園芸植物として愛好者が多いそうである。

一見無造作に開いたかにみえるこの花の姿も、実は数個の小さな花の整然とした集まりで、それぞれ6枚の花びらのほかに6本の雄ズイ、それに雌ズイも長く



突き出ており、しかもこれらが美しい弧を描きながら反り返っている様は、いかにも見事な造形の妙である。もつと生け花などに利用して欲しいと思う。

花が終わると、葉が晩秋の頃に現れて東生し翌年3〜4月頃枯れ、開花するまで鱗茎で過ごす。果実は不稔で種子はできない。まれにできて発芽しない。日本全国に分布するが、もとよりの自生でなく、昔中国から渡来したものが広がったといわれている。

神社の参道にあるのはどうしてなのか。鱗茎はいろいろのアルカロイドを含む有毒植物であるが、昔は救荒食料として飢饉の時すりつぶし数回水洗いして有毒成分を取り除き、澱粉をとって食用にしたといわれている。

なお、ヒガンバナに似ているシロバナマンジュシャゲは、花の色が白色又は黄色みがかったているがショウキズイセンとヒガンバナ（中国には種子で発芽するものもある）の雑種といわれている。

注1 深津正著「植物和名の語源」より  
注2 ひろさちや著「こころの歳時記」より

（文／小島和夫氏）

## ご紹介

『宮城県神社祭事暦』平成十七年乙酉歳

## 宮城県神社祭事暦 平成十七年乙酉歳

皇紀二六六五年  
西暦二〇〇五年



平成十七年度版『宮城県神社祭事暦』ができあがりました。祭事暦とあるので普通の暦と思われるがちですが、内容は神社や生活習慣、県内の情報盛りだくさん。皆様のご意見などを取り入れ、より使いやすく見やすくなり、お役に立つこと間違いなし。当社称宜が編集を担当していますので、ぜひ要望などもお寄せください。総代、または神社にご注文ください。  
頒価四〇〇円

## Ⅱご奉納・ご奉仕Ⅱ

- 一区 斉藤管工(株)さん 排水管一式
- 一区 只野 安博さん 洗い鉢
- 一区 左藤 庄一さん 新穀
- 三区 小野 勝さん 新穀 野菜
- 三区 戸村 巧さん 野菜
- 三区 佐藤 善一さん 野菜

## 社頭暦

- 二区 目黒 暢子さん 梨
  - 各区 神社総代各位 夏祭典神饌用野菜等
  - 一区 黒須嘉次男さん 野菜
  - 横倉 塚目 克子さん 月次祭神饌用野菜
- （祭典当事者の献饌・幣帛等は割愛させていただきました）

- 十月 一日 月次祭
- 六日 御縁日
- 十一月 二日 九月節句(旧九月九日)
- 一日 月次祭
- 六日 御縁日
- 十五日 七五三詣
- 十二月 二三日 新嘗祭(秋季例祭)
- 一日 月次祭
- 六日 御縁日
- 二三日 天皇誕生日
- 三十一日 大晦日 大祓式 越年祭

## 編集後記

記録的な台風ラッシュ、被害はありませんでした。昨年の冷夏から一転、想像もできなかった今年の猛暑。豊作と思えば秋の長雨で野菜が打撃。自然は容赦なくすさまじい。古人はそんなところに神を見たに違いありません。▼それに中越地震。心からお見舞致します。当地に予知されている地震対策はお済みですか。他山の石としたいですね。▼本紙、少々遅れてお届け致します。機械の故障とはいえ、時期を閑した記事もあり、お詫びいたします。(編集子)